

伊藤整「海の見える町」の生成

——『若い詩人の肖像』における自己表象——

飯島洋

I

「海の見える町」（『新潮』一九五四・三）は、主人公が小樽高等商業学校に入学してからの友人や女性との出会いと関係を描いている。「新潮」の目次では「詩だけを信ずる多感な少年が、小林多喜二との暗い出逢いを語る自伝」とされ、後に長編小説『若い詩人の肖像』（『新潮社』一九五六・八）としてまとめられた際には「あとがき」に次のような説明がなされた。

はじめ作者は、これ等の短編（『海の見える町』と『雪の来るとき』を指す 論者注）を更に書き続けて長編小説にする意図は持つてゐなかつた。しかし、題材を自分の経歴に取つて、その二編に続く場面に当たるところの「卒業期」を書いた頃から、長編小説に纏めることを予定した。

この作品を独立した短編として収めた短編集『海の見える町』（新潮社、一九五四・七）でも、中村光夫が解説で収載作品の「自伝的」性格について触れ、この作品によって読者は「伊藤氏の（略）精神の肌身にふれることができる」と述べている。

作中の「私」を伊藤と同定し、伊藤が如何にして詩人の道を歩みだしたかをフィクションを交えつつ描き出したものと捉えるのが、基本的な読まれ方だったといえよう。

しかしその一方で、別稿で取り上げたように、『若い詩人の肖像』の「あとがき」草稿の段階では、「モデルらしい人物の私生活の細片を捜すことによつては、芸術の真の姿は捕らへられない」「芸の必然を無視して、作者やその周辺の人々の私生活を追求し批判しても、芸の実体は見失はれる」と主張し、自伝的小説とはいえこれが私小説のように読まれることを否定的に捉えていた（二）。「海の見える町」だけでも自伝的な性格は見取れるとはいへ、「自分の経歴」を題材にした長編は当初企図していなかつた。また、初出の段階では地名や女性名も〇市（小樽市）、Y町（余市町）、S子（重田根見子、これも仮名ではある）のように固有名は隠され、容易に現実の地と同定することが可能ではあるものの、テキストの上では北海道のどこか、あるいはどこでもない場所、という設定になっている。あくまでも自分の経歴は小説の素材であるという伊藤の発想を見て取ることができる。

曾根博義が指摘しているように、作品に描かれているほど「当

時の整が直接多喜二をそれほど意識し、多喜二その人にそれほどの脅威を感じていたかはやや疑わしい」⁽¹⁰⁾。別稿で触れた「海の見える家」での多喜二との出会いをめぐる描写の原稿上での揺れも⁽¹¹⁾、マルクス主義に傾く青年を身近に感じた「私」と多喜二との距離をどれほどのものにするか探っているものと考えられ、「私」が〈創出〉されていく過程を見て取ることができる。

『若い詩人の肖像』は初出の原稿が一部の欠落を除き日本近代文学館に寄贈されている。全編にわたって加除修正の後が夥しく遺されており、作品生成過程を検証する貴重な資料といえる。本稿では詳細に原稿、初出と単行本の異同を検討し、伊藤整が「私」をどのように「小説」の人物として描いていたかを論じたい。

II

高等商業学校の入学式で「紳士」として学校から扱われると校長が式辞で述べるのを聴いた場面に続け、上級生について次のように解説される。(削除された部分を二重線により、後から加筆された部分を「」によって示した。□は判読不能だった部分を意味する。)

~~紳士たる~~ (□□□□) 「やがて間もなく勤人になるのだ」といふ意識を持つてゐる ~~いふ~~ 青年たちの句

(六枚目)

紳士として扱われるとしても、それは自己を他者が外部から規定するに過ぎない。「紳士たる」意識になった場合、学生たちが外形による判断をそのまま内面化してしまっているようにも読める。勤人になるという意識を持つということとは、彼らが外形と内面とがそのまま直結するわけではないことを自覚していると捉えていることになる。この変更は上級生の態度に対する「私」の理解を修正するものといえる。

中学生時代に「私」や友人たちが性の問題に悩まされる部分はこのようになっていく。

性に悩まされ (はじめ)、(自分たちはもう大人なのではないか、と考へはじめてゐた。) ~~昔められた~~ ~~自分~~ (□□□□) ~~を感し~~ ~~中~~ ~~時期~~ ~~を持~~ ~~ち~~ ~~し~~ ~~か~~ ~~も~~ ~~生~~ ~~活~~ ~~の~~ ~~外~~ ~~の~~ ~~性~~ ~~は~~ (の形は、) 囚人 (□□□□) (的な) 中学生 ~~が~~ ~~あ~~ ~~い~~ ~~ふ~~ 「子供じみた」 枠に閉ぢこめられてゐる ~~苦しみ~~ ~~を~~ ~~味~~ ~~わ~~ ~~か~~ ~~つ~~ ~~た~~ ~~。~~ (「私たちは、) その事 (矛盾) をたがひに認め合 (□□) (つた。そして「仲間の誰かが ~~性~~ ~~の~~ ~~事~~ ~~を~~ ~~中~~ ~~に~~ ~~出~~ ~~し~~ ~~て~~ ~~い~~ ~~る~~ ~~。~~」) 自分 (の性) を笑 (□□) (ひ話にする) ことで、辛くも息をつく、といふ、あの少年期から青年期に移る男性に特有な「汚れと」自棄 ~~の~~ ~~性~~ ~~の~~ ~~混~~ ~~つ~~ ~~た~~ ~~救~~ ~~ひ~~ ~~の~~ ~~ない~~ ~~気~~ ~~持~~ ~~を~~ ~~抱~~ ~~き~~ ~~て~~ ~~ゐ~~ ~~た~~ ~~。~~

(七枚目)

これに続けて「この学校で自分が大人として扱はれる」ことによって、こうした状態が解消される。中学生時代に性に悩まされることによって自分が大人であるとの自覚が芽生え、囚人

(九枚目)

という修正が施されている。当初の表現では当時の「私たち」に寄り添ってその心情が率直に表明されているに過ぎない。しかし修正によって、そのように教授によって心を動かされた「私たち」が、教授の真価を理解したわけではなく、彼の外形の振る舞いに動揺させられているに過ぎないことが、冷徹な語りの姿勢をおして析出されることになる。(この部分は初刊ではさらに修正され、教授が「容赦なくその実力を発揮した」ために変更されている。モデルへの配慮とも推測できる。)

「私」は「詩の表現を自分の心の本当の表現だと信じ」つつも、そこに表現される感情や判断を「日常生活の中に露出すれば人を傷つけ、自分が傷ついて」しまうことを理解し、「詩を読み、詩を書くことにだけ結びついた自分の心の働きを、露出すること」を恐れる。そうした「私」の心の、学風や同級生の言動に対する理解についても原稿は揺れを示している。

大人びた同級生たち(「の言動」)を、次第に判断し嫌う
術(はじめ、それが直ちに勤人の気質や学問のテラヒ
と結びついてゐるのを知) った。

(十一枚目)

原案のままの場合、「同級生たち」の言動とその実態(内面)の関係は特に問題にされていない。しかし彼らも「私」とは方向性は逆であれ外形と内面とに断絶を抱えている。「嫌って行く」というなら、「私」は率直に行動しなければならぬ。周囲

が「大人のふりをしてゐる子供」であるように、「私」は朔太郎や(千家)元麿、イエーツらから学んだ「詩の表現」と結びついた「自分の心の働き」を「内気、ウブさ、オクテ、それ等の外形」のうちに隠蔽するのである。

そして「自分の外の形を」勉強好きで内気な生徒というものに
作つて行つ「くことで、中級友たちの型に落ちこまない
やうに自分を守」た。

(十二枚目)

この修正によって、「私」の行動の型は、大人ぶる同級生への嫌悪ではなく、自己の性情を平穩に保つための戦略であることになる。

そして自分が詩をとおして身につけたことを押し隠したこと
が語られるが、その内容についてこのような加筆がある。

萩原朔太郎の色情と憂鬱(を通しての生)の認識

(同)

当初「私」は朔太郎が詩によって表現した情念を理解したに過ぎなかったということになっていたが、それによって自己の生の認識を学んだと修正されている。分量的には些少なものが、「私」が詩をとおして自己形成を図ったことになる重要な内容を持つている。

このように「私」は自分の外形を作為し、初手で奥手な少年

を演じようとしたのだが、これについても加筆が施されている。

(同)

彼女等のなかの、美しい少女と思はれる（ども魅力のある）四五人どに同時に愛（著）してゐた。

(四十六枚目)

知り合った少女たちの一人Nから「ラヴ・レター」を受け取った時、「私」がその手紙を評価する場面。

(六十九枚目)

この後別の少女C子に関心を寄せるようになり、彼女の印象に似ている「ティチアノオ」による女性像の写真を切り取って本の間に挟んでおいたと述べる場面では、自己の感情をこのように訂している。

その写真を得たから、私は中一層の心を患ふ心がゆゆしく
なつた。(私は何度も眺め、その度に私は「自分は本当に」
C子を好きなんだと思ひ込んでゐたのだつた。)

(七十五枚目)

原案では語り手はC子を想う時点の「私」の心情に寄り添つてそれを記述している。しかしこの後「私」は彼女が「私の情感に何のかかはりもなく」別の男性と笑い興じていることを知つて、さらに別のS子を思い出し、彼女が「生き生きと自分の心に応じてゐること」を考える。修正後は別の女性を慕う時点での心情の観点から、C子を愛するという思いが、生身の彼女から離れ、西洋絵画の女性像と彼女を重ね合わせることで仮構された感情に過ぎないという判断を下している。

以上、原稿に遺された主だった加除訂正の跡が示す、テクストの生成過程を検証した。当時の「私」の心情に対して客観的・批評的な位置に語り手を立たそうとしていることや、自己の状況を極力冷静に把握しようとする(恰も将来の小説家・批評家を髣髴させるかのようなのである)「私」を造形しようとする姿勢が窺えるのではないか。その結果、生を演じる「私」が前景化したといえよう。

III

ここからは、初出と初刊の異同について、自己表象にかかわる部分に絞つて考察しよう(引用は初出・初刊の順)。

私は学問とか学校の組織といふものを怖れなかつた。しかし私は、他人にものを言ふ時に、どういふ表情をし、どういふ形式を守ればいいのか分らなかつた。大人としての普通の物の言ひ方は、学生らしい形のものでも、私には、非常に粗雑な、空つぽな、鉄面皮な表現法に思はれた。

(一二七頁)

私は学問とか学校の組織といふものは怖れなかつた。それは、学問といふ形の枠がきまつてゐて、それを埋めて行けばいいことが分つてゐた。しかし私は、他人にものを言ふ時に、どういふ表情をし、どういふ言葉の約束を守ればいいのか分らなかつた。大人たちの使ふ普通の物の言ひ方は、私には、非常に粗雑な、空つぽな、鉄面皮な表現法に思はれた。そして同級生たちは、大人びたものごしの生徒ほど、その大人らしい粗雑な表現を使つた。

(一一頁)

改訂によって、「私」は単に所属する場において身に着けておくべき形式を体得できないのではなく、生身の他者との関係において、自分がどのように振る舞えばよいのかが理解できないのだということが明確になつている。大人とは、大人のように振る舞える人間なのだ、という認識を語り手は示している。そのように自己を演じられる同級生に、詩をとおして生を認識する自己を隠して初心な少年を演じる「私」が対比されるのである。

中学時代の「私」の詩との出会いを振り返る部分では、友人

の鈴木重道から藤村詩集を紹介されて自己の「生命の泉」を発見したように熱中し、その魅力から抜け出す必要を感じるところで初刊に加筆がなされている。

私は、外の詩人たちの詩集をさがし、段々もつと新しい蒲原有明や三木露風や北原白秋の詩を知るやうになった。

(一三〇頁)

私は、外の詩人たちの詩集をさがし、段々もつと新しい蒲原有明や三木露風や北原白秋の詩を知った。それらの新しい詩人たちを知ることで、私はやつと藤村の詩を客観的に眺めることが出来るやうになった。

(一九頁)

初出では藤村だけに熱中することがなくなつたに過ぎないが、初刊では、詩の表現に対して批評的な位置を保持することのできる「私」の像が描出されている。

「私」が校友会誌に詩を投稿する衝動を抑える部分にも自己像の変更がある。

この学校で学びはじめたステイヴンソンやシングやラムの英文の前で、かなり委縮してゐた。また入学試験の準備のために、半年ほど遠ざかつてゐた自分の詩作の働きに確信を持てなかつた。私はひっそりとして、誰にも気づかれずに、再び詩と自分との間に確かなつながりを作り出したと思つた。

(二二一頁)

この学校で学びはじめたステイヴンソンやシングやラムの英文に直面してかなり緊張してゐた。私はひっそりとして、誰にも気づかれずに、詩と自分との間にもつと確かなつながりを作り出したと思つた。

(二二五頁)

初出では、入試のために一旦試作から離れ、詩と自分との「つながり」は回復されるべきものとしてある。しかし初刊では、そのつながりはこれまで失われてはおらず、「もつと」確かなものにするが目指されている。

これと関連して、初刊の二二頁六行目から二五頁九行目までは、当時の詩史を踏まえながら「私」の詩の読書体験を綴っているが、これは初出にはなく、単行本化に際して加筆されたものである。この一節の冒頭にはこうある。

私はこの二三年の間に、詩を理解し、詩人の名とその特色を覚え、自分でも相当に詩を書いて、かなりの進歩をしてゐた。

(二二頁)

中学時代、「詩への自分の耽溺を人の目から隠すため」に勉学に勤しんだ「私」だが、初出では真の自己の性向を隠蔽するだけでなく、入試のために実際に詩から離れてしまう。単行本の描写では、「私」は自己を隠蔽しつつ詩と関係し続けていた。

「私」の像の大きな変更がなされている。

小樽在住の弁護士夫人・増川順子が徳田秋声に師事し、長編小説をホテルの一室で書いているという情報に動揺する場面でも、「私」の心情は大きく書き換えられている。初出での「私」は、「落ちつきを失った」のに続いて、夫人は上京して「中央公論」に作品を発表している人妻の影響で小説を書くことを考えたのではないかと推測する。そして「世間を知った女たちの文学に対する大胆さを私は怖れ、理由のない不安を感じ」る。対して初刊では、美しく恵まれた生活を送る女性が流行作家になるうとすることを「ひどく妬ましいこと」と捉え、「一人の人間が、同時にそのやうな幾つもの幸福を手に入れるといふことは、許すべからざる不公平なことだ」と「苛々し」、「女たちが小説を書いて男性の文士たちにチャホヤされるのか。何ていやなことだ」と思う。「私」の増田夫人への嫉妬の情があらさまに表明されている。「私」は詩への関心を持続的に抱きながら、作品の投稿も中断し、詩をとおしての生の認識も周囲には隠蔽していた。「私」は外形的には文学の分野において何者でもなかった。しかも「詩人がだらだらした散文を書いて小説家の仲間入りをする」こと、「詩を捨てて小説書きになった男」への軽蔑を禁じ得ない。詩の純粹性を信じつつも、作品が世間一般で評価されるという世俗的な問題に無関心ではいられない文学青年の姿が捉えられている。

「伊藤整の初期以来の小説の基調は不安である。(生きる怖れ)である」と野坂幸弘はいっているが^(五)、初出で不安に囚われる「私」は他者の出現によって自己の存立を脅かされる初期小説(「幽鬼の街」や「イカルス失墜」のような)の自己に

通底する性格をもっている。一方初刊の「私」は、詩を放棄して文壇への野心を燃やしていく将来の作家を髣髴させよう。

IV

以上、初出原稿および初出と初刊の異同の検討をとおして、「海の見える町」の生成を辿った。単行本化された際の帯には、「著者の秘められた青春の自画像」を描いたものと書かれているが、「自画像」は決して不動の姿としてあるものではない。観点によって、解釈によって様々に揺れ動く。また、テキストの中で「私」は詩をとおして生を認識している人間であることを隠して奥手な少年を演じ、周囲もまた大人びた言動によって大人を演じている。外側に示される像がその人間の実像であるとはいえない。それと同様、自伝小説とはいっても、その自己像は作家によって創り出される存在なのだといえよう。

〔注〕

- (一) 伊藤整『若い詩人の肖像』あとがき草稿の問題——自伝という虚構——(『日本近代文学』九六集、二〇一七・五)
- (二) 『伝記 伊藤整』(六興出版、一九七七・四)
- (三) (一) および日本近代文学館編『近代文学草稿・原稿研究事典』(八木書店、二〇一五・二)
- (四) 一度書かれた「た」が消されて以降が書かれた後、この部分全てが全て削除された。
- (五) 『伊藤整論』(双文社出版、一九九五・一)

(いいじま ひろし・金沢大学准教授)